

## その後の荒木村重と子孫

メモ)鉄本 2023.02.19

伊丹の有岡城主であった荒木村重とその子孫の岩佐又兵衛について、瓦田昇著『荒木村重研究序説』を中心に情報を整理しました。

### 1. 経緯

天正6年(1578) 逆心のうわさ 有岡城に籠城 黒田官兵衛が城内に幽閉される。

7年(1579) 9月 有岡城を脱出 荒木村次(村重の嫡男)の居城である尼崎城に移る。

荒木親子は荒木元清の居城である花隈(別記:花熊)城に退却

11月 有岡城落城

8年(1580) 7月 花隈城落城 毛利方に亡命し尾道に隠遁

天正10年(1582) 本能寺の変

天正11年(1583) 秀吉に許され堺に戻り居住する。「道薫」と号す。千利休の弟子となる。茶人として秀吉に仕えたが、秀吉との間に確執が生じ、天正12年以降は茶会への出席が減る。

\*当初は、自虐的に「道糞」(道端の糞の意)を名乗ったとか。

天正14年(1586) 最後の茶会 堺で死去(52歳)



墨染寺の  
九重の石塔

### 2. 関連寺院

◎墨染寺(ぼくせんじ 伊丹市中央6-3-3)

「有岡城の戦い」で焼失後、伊丹の酒造家加楽井氏(後に上島に改名)によって再建。

荒木村重の供養塔と言われる九重の石塔(写真参照)、

信長によって処刑された荒木方婦女子の供養塔(女郎塚)がある。

◎荒村寺(こうそんじ 伊丹市1-15-2)

嘉永6年(1853)に一妙法因尼によって開基。以前あった城山庵を有岡城址に移し、荒木村重の菩提を弔い荒村庵と改名。

昭和39年(1964)に寺号を荒村寺と改め。

荒木村重の位牌「心英道薫禅定門」を祀る。

◎南宗寺(堺市) 位牌「秋英宗薫居士」(供養塔等は不明)



### 3. 茶人としての村重

「利休七哲」の1人として名が見える。

(注)「利休七哲」は江戸初期に定められたものであるが、諸書によって人名に異同がある。

村重の名が見えるものは、寛政版『古今茶人系譜』であり、そこには織田有楽斎貞益、蒲生飛驒守氏郷、細川三斎忠興、瀬田掃部頭忠正、高山右近友祥、荒木撰津守村重、芝山監物俊一の7名の名がある。村重が出てくる茶会の記録は、次の通り。

①「天王寺屋会記」: 津田宗達・宗及・宗凡三代の茶会記。全16巻。別名「津田宗及茶湯日記」。

「他会記」と「自会記」に分かれる。

- ②「今井宗久茶湯書拔」：全2巻。自会が20回、他会が63回。
- ③「松屋会記」：松屋久重の編集。久政・久好・久重三代の茶会記。他会記のみ記述。
- ④「仙茶集」：文禄2年(1593)に宗魯が堺で編集。「荒木道薫筆会記留書」を収納。

年代	出来事・茶会(同席者、回数)	記録
元龜2年(1571)2月5日	<最初の記録> “池田紀伊守 石成殿 荒木弥介” (=池田恒興、岩成友通か? 荒木村重)	「宗及自会記」
天正 4年(1576)	2回	
〃 5年(1577)	3回	
〃 6年(1578)	10回	
天正7年～10年	<茶会に名前は出ない> ・村重は有岡城籠城、落城 ・毛利方に亡命 ・本能寺の変 ・	
天正11年正月19日朝	初めて「道薫」の名前が出る。 “亭 宗易 客 道薫一人” (=千利休と荒木道薫のみの茶会)	「仙茶集」(「荒木道薫筆会記留書」)
〃 11年(1583)	29回 天正11年は荒木村重が堺に復帰した年であり、秀吉、宗易、宗及など多くの茶人と交流。	
〃 12年(1584)	5回	
〃 13年(1585)	3回	
〃 14年(1586)	3回	
天正14年(1586)4月21日	<最後の記録> “堺荒木道薫へ 久好 草道説二人” =松屋久好、草部屋道説又は“道設”の表記 (注)『堺市史第七巻』には「道雪」と記載。堺の商人。今井宗久の門弟。	「松屋会記」 (「久好茶会記」)
	荒木道薫の茶会回数=計56回	

#### 4. 村重と秀吉の関係

##### (1) 村重への経済的支援

①秀吉は憐みの心で村重に和泉国の一両所を与えた。

(『寛政重修諸家譜』:江戸幕府が編修した大名や旗本の家譜集 1530巻 1, 114氏、 2, 132家を収録 右写真)

②道薫所持の「兵庫壺」を高額買入れ

秀吉は織田信雄との和解のため、「兵庫壺」を代価1500貫文で買入れし信雄に進呈。当時1貫文は米にして2石であり、3000石相当の金額は膨大なものと言える。(「宗及他会記」天正13年2月25日の条)

##### (2) 秀吉との確執

かつて配下にあった高山右近に対する評価の違いによって両者の間に溝が生じた。



秀吉： 右近の才智と善良なことを賞賛

村重： 村重謀反の際に右近が信長側に残り村重と敵対したことが背景にあり、右近には裏表があり信用ならない旨を発言 (『イエズス会日本年報』 天正12年8月9日)

## 5. 村重の没年

### ①「文禄4年堺で没」説

『伊丹の史跡をたずねて』巻末「伊丹郷土史年表」(伊丹市教育委員会発行)に、「文禄4(1595)年 荒木村重堺に没(64)南宗寺葬」の記述。

これは郷土史家山本賢之助氏の説で、裏付け史料はないが晩年の活躍状況から判断したもの。

### ②「天正14年没」説

荒村寺に祀られている位牌「心英道薫禅定門」に、「天正14年丙戌年5月4日」と明記されていることに根拠を置いているが、当寺の建立は嘉永6年(1853)であり、位牌も同時期に作られ祀られている点に留意する必要がある。

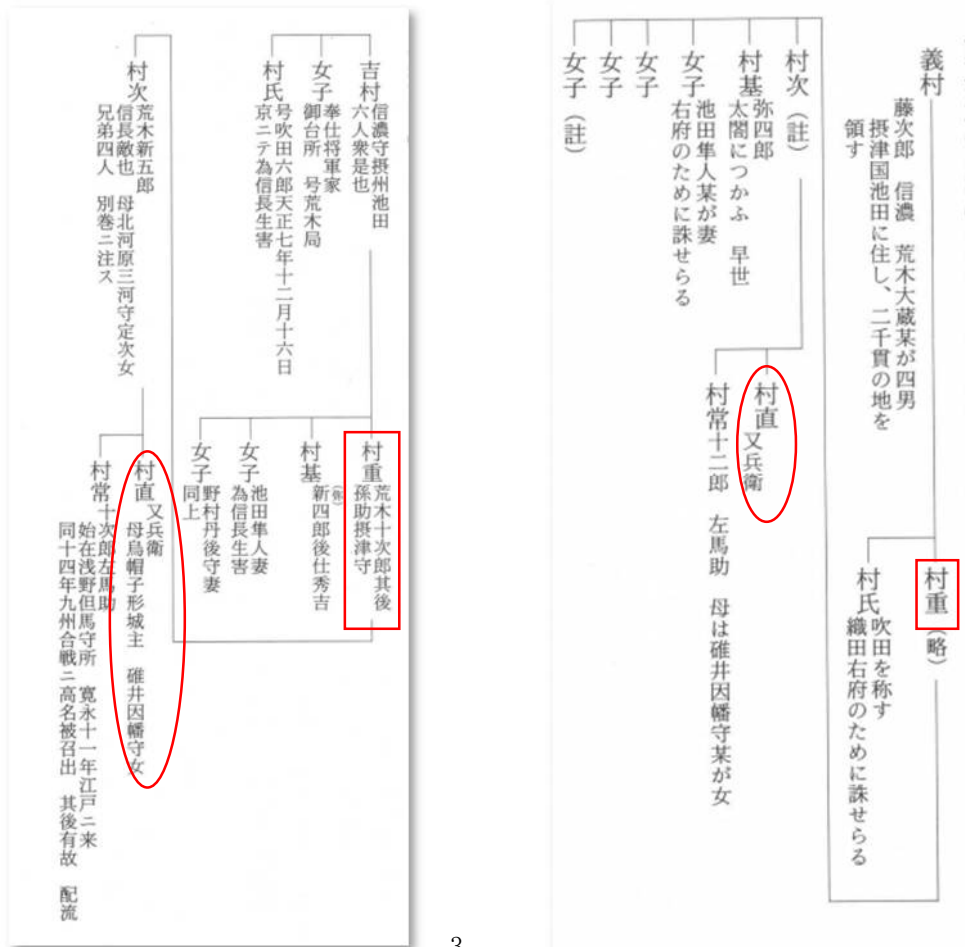
他にこの説をとる書籍に、『古今茶人年表』(石田誠斎 昭和10年)、『茶家系譜詳本』(石田誠太郎編 大正10年)、『寛政重修諸家譜』(江戸幕府編集 寛政年間)がある。

\* 天正15年の北野大茶会には1度も村重の記録がないことから、「天正14年没」説がより妥当のようである。

## 6. 荒木氏系図及び岩佐又兵衛

### (1) 荒木氏系図

荒木氏の系図に「荒木系図」(下の左図)と『寛政重修諸家譜』(下の右図)の2つがある。



「荒木系図」は荒木村次の次男村常が幕府に提出し、『寛永諸家系図伝』（寛永18年～20年に編纂）に所収されたものである。

荒木村直（むらさと）については、「村重の子であるとする説」と「村重の孫」とする説がある。

<「村重の孫」説論者>

- ・藤貞幹：『好古日録』（寛政9年刊） ・畠山浩一氏：『國華』第1364号「岩佐又兵衛伝再考」
- ・堀直格：『扶桑名画伝 53巻』（安政元年刊）

<「村重の子」説論者>

- ・瓦田昇氏：『荒木村重研究序説』 ・辻惟雄氏：『国華』第1364号「随想 岩佐又兵衛は村重の子か孫か」

## (2) 岩佐又兵衛について

江戸初期の絵師に岩佐又兵衛（諱は勝以）がいる。

生年は天正6年（1578）江戸にて没、没年は慶安3年（1650）。

「浮世絵の祖」と言われ、美人画の典型を生み、風俗画にも新風を開いて、「浮世又兵衛」と呼ばれた。越前北ノ庄藩主松平忠直の厚遇を受け、後に江戸に招かれて川越東照宮の歌仙絵額を制作。

### 【主な作品】

- ①「洛中洛外図屏風（舟木本）」（国宝）東京国立博物館蔵
- ②「山中常盤物語絵巻 12巻」（重要文化財）MOA美術館蔵
- ③「浄瑠璃物語絵巻 12巻」（重要文化財）MOA美術館蔵
- ④「三十六歌仙図額」（重要文化財）仙波東照宮蔵



伝岩佐又兵衛（自画像）  
MOA美術館



国宝 紙本金地着色洛中洛外図（舟木本） 東京国立博物館蔵

（右隻）

### 【又兵衛論争】

岩佐又兵衛については、不確かなことが多く、次のような論争がある。

①実在した人物か ②浮世絵の元祖か ③又兵衛の出自（荒木村重との続柄、岩佐姓の出所）

①については、

- ・東照宮絵額裏の「土佐光信末流岩佐又兵衛尉勝以図」の署名の発見（明治19年）
- ・「岩佐家譜（由緒）」の出現（明治31年）によって人物の実在が確認された。

②については、浮世絵の定義・範囲により定まっていなかったが、評価は年々高まっている。

③については、「岩佐家由緒」には、次のような注目すべき記述がある。

- ・岩佐又兵衛の諱は、「勝以」である。
- ・又兵衛は村重の末子である。 ☞ 『寛永諸家系図伝』の「荒木系図」と食い違い
- ・村重は尼崎に脱出し、そこで自殺した。 ☞ 明らかな間違い
- ・落城の時又兵衛は2歳だった。
- ・又兵衛は母方の岩佐姓を名乗った。 ☞ 荒木村重の妻に岩佐氏出はいない。

以上を根拠にした諸書がある。

- ・「画乘要略」(天保2年 白井華陽著)には、「岩佐又平名ハ勝重」は荒木村重の遺孽(イゲツ 妾腹の子の意味)で越前の岩佐氏に育てられたという記述。
  - ☞ 「又平」の表記は間違い。大津絵絵師の「吃の又平」、「浮世又平」との混同。
  - ☞ 「勝重」は岩佐又兵衛の嫡男であり、遺孽とするのは間違い。
- ・随筆「遠碧軒記」(延宝3年 黒川道祐著)には、「憂世又兵衛」は荒木摂津守の子とある。
- ・通説：荒木村直(又兵衛)は、有岡城落城の際に乳母によって逃れ、石山本願寺に保護され、後に、荒木村直は、母方の岩佐を名乗り、岩佐又兵衛(後に勝以)の名で絵師となった。

#### 【荒木姓から岩佐姓への改姓について】

荒木又兵衛は母方である「岩佐」を名乗ったとあるが、又兵衛(村直)と岩佐氏娘を結ぶ史料は見当たらない。荒木又兵衛が村重の子としても、また、村次の子としても、それぞれの妻に岩佐姓の女性は見当たらない。

- ・荒木村重の妻：池田長正娘、北河原三河守定次娘、川那部氏娘  
妻に「だし or たし」という名の女性がいた。「出丸」に住居を構えていたことから「出(だし)殿」と呼ばれていた。この女性が母という見方もあるが「立入宗継記」には大坂の川那部氏娘とあり、「だし」は岩佐姓ではない。
  - ・荒木村次の妻：正室明智光秀娘、側室碓井因幡守娘(荒木系図によれば村直の母)
- \*記録に表れない岩佐出自の妾腹がいた可能性は否定できないが、明確な史料は見当たらない。

## 7. 岸和田の昔話 ～岸和田市荒木町～

乳母の機転で命拾いした荒木村重の4歳若君である岩楠は成長して源太夫と名乗り、荒れ地を拓いて当地きっての豪農となったので、いつしかこの辺りを「荒木村」と呼ぶようになった。

#### 【参考文献】

- ・『荒木村重研究序説』 瓦田昇 海鳥社 1998
- ・荒木村重研究会会報『村重』 創刊号、第4号、第11号、第15号
- ・「荒木村重」リーフレット 伊丹市教育委員会
- ・『堺市史』
- ・日本大百科全書 (岩佐又兵衛について、「村重の子」説を取っている。小林忠文責)
- ・HP『ウィキペディア (Wikipedia)』